

塵点録

六十五

049
ア3
65



寄贈
昭和
5年
5月
1日
品目
揚子
書課

輕便藥法

毒蟲三甘

烟美造法

升可地
不香可
試不法

差本傳

申繁西
曲名座

塵點錄

雜會門

六十五

差矢長生門

41

A04
73
65

A04.9
73
65

愛知縣
史編纂
原七

題聽泉子蘭亭記詩并引

秀才氏近藤名某字惣五郎別
聽泉子政疑夙成頗嗜書學師新
井某受筆法矣一日以古山禪衲為
紹以來就余請肄句讀偶所其書
蘭亭記一卷齋爾來時余取而閱之則
寔二王之蹟而結構間架隨意欲轉
化殆有非凡庸所能及者是歲才幼
學已著老成之骨法自今不懈而及
於古呼々可謂真英物余歎賞之餘

愛知縣文化會
83.7.30
40304

賦不律一逸ツ羌小引自題其尾聊嘉
尚之云龍輯庚午夏之孟

侗齋敬迓子暗甫書
天生好字一男兒 眼底龍蛇躍墨池
琴蟲紙摸來恰相似 逢人即說小義之

予按魏白陽が参同契河上姪女得以下則飛

○蠟燭のよの中よ水真永のひと入只みふうたぬ火と
舟投るにうろと火と鉄い道し中
ちりる志りく地よありともとふ

○燒毒の栗れ木のほとと能少と烟麻の池
よそ舟をくく吾各よありうらるおと池まも
契一用

○又井のつるいの水あり色も
○荒小喰ひくくわを相の木と火ふと炭とと
そよと沖くて舟をくく者
○子足小くくん者もとめれよ膝又わくく者
少々者ありくくを焼く 卵くとくく者
少くくくわとくくく
○牙痕又足くくくくくくくくくくく

落るるを楊柳ばと教もあらし御名の
糊も凍て分るる者

○ 雪の冴ゆるるを山椒の目とあつ
て分るるも昔又涙と春なるも昔

○ 雪の冴ゆるるを花雪と別天と
し象天はほのり

○ 山椒のしるるを花雪と別天と
いふはよもし物なるをいふはよもし
急ぐはよもし物なるをいふはよもし

○ かく切る庭をちきりしつと纏を構へ
分るる者

た九条路の雪解のあつたる
た八段我方の十二巻目

○ 何れも地よもしあつたるをいふはよもし
枝の根をたつたるをいふはよもし
つよもしつよもし中よもしつよもし
あつたるをいふはよもし

○ 鼻の内よもしあつたるを桃仁と水
出つたる

○ 源教極の世相として世俗移りたるさまを
 三ノ人のいふ黄らん利らんを
 ○ 日少詞としてるるるるるるるるるるる
 り
 ○ 上のあとのく申とらひていひていひて
 ○ 世俗は 驕ては僻の波をいひ
 ○ 詞は鼻のぬののまらるるるるるるるるる
 うれのとやうれげの見まらるるるるるるる
 ちるるるるるるるるるるるるるるるるる
 二返して葉巻の筒をとりていひ

○ 甲血のあはれをいひ
 ○ 借鏡は日月之目雲深くも合鏡をり入る
 郭とて之は死をもとむる人徳徳とて
 ちいかにうれを去くは借鏡の流るるる
 知るるるるるるるるるるるるるるるるる
 守りていひていひていひていひていひ
 ○ 紙の糸の糸は麻はあはれとていひていひ
 とていひていひていひていひていひていひ
 切ていひていひ
 ○ 蜈蚣其の毒めたるの毒をいひていひていひ

多しぬのやむより又ほろの水垢鉄
炮の筒茶をふる若又さうさう方忠と能
けし

○ 煙焼切麦の比くく淋めさよ小杏仁と水
少むくしてのむ む杏仁刺挿く

○ 中粒の買てくして階外で疎流橋下扣水
湯温涼くして雅凌まて茶末と云ふこ
たよるこてく糖菓と高直は温

○ 是豆くやいあつのおと煮きると俗
ぢんぶと云近湯庭を徳と下早きらる

各うなとて都春燈とはけ流るん後すは
柳楊屋下をまかせくあそむるれか
ありりりのあのことあ

○ 近湯流のよとせんを必を考あつと云俗
よえなとそよゆとめあひか

○ くらここのまとさうおゆとてあつらふ
小児の海の虫土切おま
くらおゆおま久おゆおま久おゆおま

○ さいじのまおあつとてくらおゆと
む好ス

○ 常市木の葉と酒のくさる恒川女好ニ

○ 元禄己未未六月一日地の月一日地の月一日と蜜雲

をよ。法口山投飛法風吹冬の時く靡

おろりも西の止まると二日所はく所取

鶴を掉車軸を瓦欲壞雷を公一夜も

舟中の旅は溢起白浪逆を枇杷橋橋を

上堤さす（）外ありこあり

○ 何よりいふ金ゆりるをさひぬ佐指を

こねりといりくこ申よとく又の松のおお

小やよのりりもあしりりこあうとありて二日

新あけを春

○ 俗世信よ云味暗さくちあぬたあぬを

云云心とふひ今より味暗さくちあ

りり揃んと云

○ 一日一夜の河の流七十五里河と云

浄土七より和 天の二よりハ 支流美薩

天親美薩 長良具とハ 道徳善師

普導大師 鈍書 ねまよ七法総上人

恵心僧都

○ 尾陽長屋六段の遊京都指矢射く

首尾の要なりとぬは京音相なり
 長秀東門の甲斐の長秀殺して
 少ねとてとらふ曲りな
 見えきくちふ目とせれ毒の毒り
 鼻毛も長居り首尾のとりや
 紫瓜の海をりしとあつぬは射の
 上りのちりしとつこいそ尾別
 右ら六たふとせぬはさうとせと
 初もかくちりしとぬかあり
 〇 人月候暇初免殺さるる事あははしむ

小便の要なりとぬは京音相なり
 〇 浪里の舟の道の穴は指の薬はく
 とちりしと一帯はさうの薬ははじ成り
 堅きことし先薬はさうあは口の薬は
 穴とあけ口の薬は指の薬はさう
 ちらま居り口の薬ははじ成り
 仰りて法り能う干ス矢は行の細き
 〇 仰りしと巻張りしと方三人の余を
 て吾但けり合ひ身はけり合は短くて
 五分口傳又夫の細きおも是也

紙造法くも一本糸之或本夫の流も
相も厚紙の糸と寸程わけさるる又相
ちくさをも若又けり合の時いと或寸
五ふよ切く夫の本よ押也けり合すれハ
けり合所不短尺いとそ若り合すハ夫の
糸の糸も又けり合所若り合すハ夫の

花火の方

四段地寺後と下段の方

子牡丹

硫硝十五 硫黄 五五 一灰下 燄八分

綿束

硫硝 十五 硫黄 五五 一灰下 燄細く七八分
山椒 少く必ず糸束にいし或ハ糸束繩糸成樹糸ハ
山椒木 止江越月と椒木ハ杉木ハ山椒木と接少ハ
忌定 糸束ハ山椒木ハ杉木ハ山椒木と接少ハ

○ 流早糸と 硫硝 五五 一灰下 硫黄 五五

○ 木火土金水 五神と名 填安姫 又生填山姫 氏

木 句々通馳火 軒遇突智 填安姫 又速秋津日命
金山彦水 固象如 又速秋津日命

○ ぼろろに焼毒もろろに焼く徳のつらさ
痕小川はりり又痛と云位振源を左に習う

○ 夏のあふれ蛾のあふれもろろに焼く徳のつらさ
酒と徳のあふれもろろに焼く徳のつらさ

今俗小南天のあふれは灯よさしてま
虫不見と云

○ 俗小異のあふれと上々の器のあふれ

○ 蕎麦切之後水尻不可喰

或人蕎麦粉ヲ水尻之汁ニ而コ子ケレハ蕎麦

粉一合が壹外程ニ成リヌ

○ 餛飩之中エ米飯ヲ入レハ暫時ノ内ニ解ケヘリヌ

○ 源頼光正暦三年夏瘧疾ヲ患テ高段西冬

術貴僧碎法トイヘ氏無減時儒師舟橋

大納言来リテ杜子美ガ詩之子章ガ體

饒血糲糊手ニ搥擲還雀大夫之詩句誦

給ハ瘧疾頓ニ愈タリ

○ 漆ノ何ノあらもももも塗りもももも思ひく

ト地ノ灰里ニもも塗りぬれてぬるる

灰墨仕候ハ先ツ酒ヲ少シ入テ練リぬれて

コ子塗リ干テ凍ニテ又ル 湯を初入り子湯とありき
亦灰墨ニ酒ヲ入テ練其中エ吉野涼ヲ入テ又ル
○元祿二年己巳秋世上何トナク騷^{ガシ}其故ヲ
尋ルニ武藏御殿ニテ女童ノ髪ヲ切り忽ニ
霧ノ如ク電ノ如クニ失テ何者共不知己ニ往
住此怪異在リテ尾張ニモ其妖物出ヌト云
テ女童昼ダニ遠不遊ニシテ夜ニ入ハ戸ヲ
堅メ窓ヲ塞イテ恐懼スル一^レ無限^リ或巾下
或廣井ニテ己ニ被切^レメリト云共其證不定於
是^レ何者カ。シ初^ケ家毎ニ鮑ノ貝ヲツルシ

亦歌在リ其歌ニ云

天^ニ心^ニの^ノ天^のの^ノ河^の糸^のれ^ん々^々乃^カ人^の心^の不^覚を^まを
天^心ニ^の天^心の^河糸^のの^心々^の々^のの^心々^の心^の々^の々^の心^の々^の心^の々^の
又字ニ字在

ちとやあまはけりこれと行そまてよ哉あは
あくと云んれはけり後^に能^く人^を盗^む人^のは業
ありと云又^は人^を盗^む人^の業^の出^る挑^燈の
と云んれはけり人^の業^の出^る挑^燈の
と云んれはけり人^の業^の出^る挑^燈の

女童ハ將倒しる海の中の刺し髪を切らせ
 同日午に夕により初と年中中小多科とせぬ
 日ありとせせししゆるし白を多く照しし
 半ま上り石突敷をとと何者た不知
 〇 雲流一し水石鹽を入て破り
 雲と流一又洞行の先に沖をはらせ
 一の別を枯木のめく流水のめくあら付
 一と入しけ干しし一とあらしし
 又流を入してし一と傳り
 一の傳り一の傳り一の傳り

小石海流

〇 小石海流は幾度も崩れし
 〇 東地の粉の相もととおらんにおらる
 〇 多く合してあるはし水流ありと
 〇 石の倉といふ糞とあらししと
 〇 時ハ二十の中に個をあらしし水中ありと
 〇 或は船ヲ石室三入個を一小石垣も
 〇 多く合して推し小石相つししと
 〇 不合數日後小石海らりとしめられ
 〇 らりて又洞とし

○大凡大蔵山一日子雀あふ十程の二層
乙のまゝと云

○鳳凰山甚目寺の愈版ニ 疵気ノ妙薬
こころ 乾干の 乾薬の ありあけ酒三月

女血ノ良薬

秘傳の良薬のつづきニト云能あり好
薬ありわらめ酒三月

予一日甚目寺のあり一人の僧より云て
時僧の云いおとる云むし一辰若丸と云し
老あり海より引出せしと云膽部端金

終り上言んをく人あり

同寶塔の内一弁きくの云きく法華經を又
土佛存り是らんる人ありと云塔の

東田種昆沙門西の磯は沙門昔同種魂

同寶塔の内小三柱ノ神意存りと云塔の

夫ニ柱神意の古今ノ帝王ノ重谷と云

專政祖二月と云りて神威寶物出多

し七仏塔ありわらんや浮屠妖惑猶難信

同寺小鳳凰山と云金字ノ額をよれと

後白河院勅をたりしと云之を塔内を係

四五

月増小弘法(他の大馬あり)

○ 蓮池エ不浄流シテ蓮歎消_トニ衣ノキシラ
入レハ又解_ト葉_ト浮屠_ト難信_ト又云藍ヲ蓮_ト
故ニ衣ハ藍ニテ染借墨ニテ染ル故

○ 紅蓮ト白蓮ト一所ニ種シハ紅蓮負テ皆白
蓮トナルト云

○ 芍薬太々鉄ヲ忌ム
細_ニ麻と交テ織タルヲ知_レト欲セハ女_ト他
ノ端と火_トリブレハ曲リテシヨリクトナレハ

麻在れ有之

○ 十月十二日秋日_ニ皇_ニ宗_ニ御影溝トテ色々ノ
作り花ヲ佛_ト供ス諸人手拱而詠ム

○ 十月十四日_ノ晚ヨリ朝至_ニ浄土_ニ宗_ニ平夜ト云_テ在
○ 十月廿二日ヨリ廿八日至_ニ向_ニ宗_ニ御_ト詔_リト云_テ
アリを夜ナリ

○ 俗_ニ云_テ茄子の本_ニ瓜_ト玄_ト栴_トと_カぬ_レの_ニあり_ト

○ 混_ニ中_ニハ_カ茄子と_カ入_レカ_ケハ_カ混_ルる_ト云_フ

○ 一切の本_ノ子_ノ毒_トカ_ク茄子_ト能_ク消_スル_トの_ニあり_ト云_フ
○ 毎_ニ月_ノ十月十日_ノ朝長母寺_ニ無住_ニ縁_ニ日_ノ故_ノ像_ヲ

開キ經テ誦シ百味ノ飲色ヲ供シ數香之雜言
ヲ薑ス

漆扱ノ覺

赤色 本朱一匁 漆八ト。土赤色 土朱一ト 漆一匁

○深黒塗 油酒三ト宛 漆一匁 灰墨能キ程

○春色 下地ニ梔子塗り。夕メウルニテ塗り

○夕メ又リハ土朱水ニテ解テ塗り。上ラ漆ニテ

○三返塗り薄ク夕メ又リヲカクル

○若 鞠ハサビ地ニ花塗カクル

○拭立ハ下ニ何ニテモ塗り三返漆引吉野漆

ニテ又ルナリ

春慶ハ夕メノ如クニ下地ヲ仕上ハ拭漆ナシニ
夕メ薄クト塗り吉

○三年拾皮ナリ 疝氣ノ葉 恒河佐左ヨリ習フ神驗即滅ナリト云々

○三年拾皮ナリ 茴香ノ皮 右等々少拾皮多ク胡椒拾皮ノ半分
過程

右三味粉葉素湯ニテ用ユ

○俗云傳毎年九月廿日天神出雲国行給

○毎年十月八日醫者祝々昔々及ひて第師

紙不所謂縁日ニ

款冬ヲサスニハ先地ニ竹ニテ穴ヲアケテ款冬ヲ

サシコム

○一切サシ木ニハ天^{カマ}凡^{ツル}ヲ割^ツ水ニ浸^{シテ}滑^{ヌグ}ヲサス
木ニ塗りテ妙ナリ 右ニ條^リ乃^リ存^シ希^ク更^ニ傳^フ

○江^ノナトニテハ牡丹一寸在^リ接^ト云^ハ

肥^後西^國八^代蜜^柑之^樹本^ハ一^本ナ^リシカ其^ラ折^リ
曲^クテ四^方工^造此^乃三^國君^次三^家老^中ノ
用^ヲ達^{シテ}ノ餘^リ諸^國工^高賣^ス

○元^福四^幸未近^年杜^丹出^雲白^ト云^在リ物^惣射^白而^球千^年
雲^綴一^方種^瓊天上^之瓊^珀帶^雲母^ヲ

落^人間^仙東^之鶴^毛磨^水晶^生塵^土誠^ニ
奇^絶之^名花^之其^木漸^華三^輪著^物ハ價^ニ
至^金五^十兩^ニ

尾^城光^友公^此花^ヲ欲^シ給^ニ依^而平^岩瀨^兵衛^二兩^ニ
二分^ニテ花^斗ヲ調^進上

○毎^歳十月^廿日 俗^ニ云^フ惠^美須^講ト 人^祝云^ク

○毎^歳十月^七日 俗^ニ山^之講^ト云^專大^工所^祝

○俗^ニ灶^中水^入火^消人^ト云^ク

○後^派を^シ好^ト云^ク

○穢^ノ意^ハ炭^火を^入シ^務水^洒テ^水

相敲手蒸気騰ハめけなぐまねハハまるく
るけて悪くくくくと云水風呂釜揺小多く
まろり者あり

奉寄大通寺和尚別離之吟

小川大夫御
謙室橋

客棹不暖暮村鐘 紅淚竜鐘愁思濃
傳語弟山多山友 柴門一別亦難逢

和磯韻謝不連笑擲

莫催一打夕陽鐘 熟面難辭果味濃
依憶蜀川餘錦織 此時分索奈相逢

小春廿一日

鈍翁

夫子追善

掃石燒香幾度情 秋風忽進斷腸声
十又七年凡如夢 想像西方極樂城

ドウカラ引タルカマ
入浴しつゝ

○ 俗に節ふとく焙燥所掃ぬのありと
俗疾不瘥瘥と除く茶 枇杷の葉紙湯ハ

入浴しつゝ

○ 世俗に節ふとく焙燥所掃ぬのありと
云心と云ふのこま焙燥とほけぬのこま
○ 為を懐と申わぬのこま

とキチのふとに味塩と焼いたふとふと
忌む滅りのいふと云憐とて焼くかこのこと
一ウのハ云ふ友

○ 鯨の食傷も九十年毎と食て物と振る流下

○ 厚凡上居と木海くも子と紙吉

○ 厚凡喜飛押振ハ先年好と年墨ととた膠
と高蒲漢と支て引能干く後形と新中
よそちらくく牛墨と高蒲のつと支て
吉高蒲のりかあるととくくくくくく
○ 月令或ハ慶する今ものあふと朴ホウキ少とあけ

まハ云ふ印のふとてい墨りさびるあふ

○ 漆の巾比のはね地ふたりの漆のふたりののふとせしめ漆と支て
層くそて引能干く好漆と能くそれ
細刺力磁とてささあけてななる地よとさ
あつてむくあつたさびことせしめと支てく
くくくくくくくくく

○ 沖繩の丸や 焼火の上よ土墨とあふとさ
初ささハ竹板あふ

○ 墨色ハ 油煙 同 油煙下リヤウ前記

○ 青漆ハ

黄彩ハ

雌黄同

葉の木の枝と作りしき葉ありてさるるものと
深ふくふくして葉ありしと

宰相云浄土名是めて深くと葉の枝切きり
あるは思し十二の程くをむ日小なる

專中凡ラ除クト云

○ 世俗南葉として南の方ふ菊とて人もす梅と
杜子あり侍りし南葉再逢人臥疾は是あり
云出しせらるる
又雅聞ノ音と假ルカ

一 錫ノ古キヲ新ニ琢ハムソノ葉ニテ琢タレ
カ吉又羅紗ニテモ吉

○ 鶯ハ向ニ巢ヲ作ハ必鶯ノ子ノ中ニ郭公
ノ子アルモノナリ

○ 鯽ヲ鱗取りテ白水ニ浸シ漸シテ切煮タレ
カ吉凡味各別也

丹午

何斎

天中佳節幾年名 千此一万兮難續成
此日遙憐細葛雲 屈醒不用酒杯傾

和

自笑蒿木

何齋先生端陽日揮毫被練出絕誠精
金得于烹炒者然也不愧讓少分謾樊手
厥高韻伏乞正削

當樓藝苑樹鴻名 知累世翰林老成
入句香羅今尚古 愁曠午日令人頌

端午

強藏司

旅寓逢佳節 艾懸諸搏虎
雲領楚江恨 金盃菖酒淡

閑吟滿寸胸 旗動擬駕龍
雨還齋境濃 壽考好持儂

賡強坐元丹五芳韻冀以得來和尚之

梅氏云達上天竺三ヨリ
來得來和尚ト云
都乎文哉ヲ不學子ハ讀ソコナヒ
平文我トヨミシテ字ヲ讀退ノ辭

明正都平夫我之誤云

佳節動四羈思

揮毫披錦胸

禪閑速化蝶

玄論覺猶龍

別有工夫密

豈須習氣濃

南宗無一物

借問孰斯儂

何齋敬牙甫 敬賡

韻套 切文字と云

欽次

何齋先生重五

華躅

平素用來不為名 諸生隨化俊材成
佳晨詠賞浚雲句 高雅清新肝膽傾
○ 巖寒三三燈油不凝胡椒油桶中三三粒
入于置六不凝妙也

風鈴

福富氏

花恨春風鈴好風 面葉曾侵寸心中
莫驚衲祖岩頭夢 可近孔門宰氏窓
盆中小魚為盆石所摧
保護小鱗身自恣 杞天逆碎沒盆泊

由来此夏不今日

水好浮舟還西復船

二。一。三。五。二。二。四。一。一。三。一。二。二。一。

繼子立

十二當ルヲ除ク

重五

天中風色靜
新竹翠容淨
隨時薦玃玃
絲索懸萱室

微雨步幽房
艷榴花氣香
賞節酌蒲觴
南山壽考長

葦航重藤隆州

同

坂見鄭

鼻羹恩賜節 匪我白茅軒
艾糝纏朱索 香蒲酌玉樽
紙旌眩醉眼 投鑑粲吟魂
借問汨羅客 醒來湘水源

神君讚

義直鄉

源家正嫡 武門棟梁 真新田跡
出參只鄉 威風大振 德澤益彰
所向無敵 不招敵降 有仁有智
克柔克剛 一統勦業 万^年夔永昌

右在傳通院

公安夫人讚

曰

管家苗裔 穗日右孫 有慈有孝
慎行慎言 貞潔而直 柔順且溫
崇寂滅教 皈釋氏門 信心堅確
了生死源 爰寫遺像 招他幽魂
定省如在 干晨干昏 以敬不怠
何忘洪恩

右在相應寺

謝答 三省堂主人重五芳律

龍鑄佳晨日 雨和嘯竹房
尤憐才色廉 更羨藻華香
迎節貯神水 感眈啣壽觴
獨醒皆醉笑 身預楚流長

武陽恩園客

願軒坂

自笑上坐辱見和 余地脫不律其躄
制也高邁峻逸矣 不勝良荷再奉前
韻聊伸謝意 笑擲幸甚

比來飛錫去 耳靜曰禪房
法水洩源遠 雅風吟詠香
閑中憐雪月 塵外受壺觴
世路遑々客 羨次君幽意長

葦航堂藤隆賡

○ 刹那 一彈指ノ間六十五刹那

○ 馳僧 牛馬の市といふ

○ 三寶 仏法僧

○ 糝汰瓶 糝汰 糝汰 秦太 並同

○ 放下着 福家より夏と栴毛といふ

○ 謎メ 隱語カ 慶詞カ

○ 四重ハ五戒ノ中飲酒ヲ除ク 律ニ波羅夷罪ト云

斷頭罪ト云

○ 後婦トシテ字ハ佛也ト出テリ

○ 額掲

○ 藝經云彈碁ハ兩人對局白黒碁各六枚

先引碁相當更先彈其局以石為之

支文類聚前集云魏文帝善彈碁

能用手中角

○ 疊波 攤ヒラ 展ヒラ 文

○ 天平十九年五月小初ありて百官詔人悉葛蒲

の慶とくくしつらんりの宮中に入るる

とさめられ

○ 酒吞志と大戸と云酒吞志所小と云

白氏文集より

○ 元道山が清よ 天恐文人未及才常教零落

在蒿萊

○ 羅山のいづ浮屠の流とい西域を倭多羅

素祖纜あんといふと翻譯より

しつふとんといふと平人の書の号と云

師といひ曲といひ別内かの字がくくくく

○ 竹教大師と云経と書字と云
○ 於繼 齋香 年黄るるれれ目もる
嵩明教ハ教中戒と五帝れ内れ仁と云
これハ仁と能るるるる教也

謳 久世舞
諷 曲舞
謡 九節舞
観世
今春
保昌

唄 口勢舞
金剛

七小町
海部活弁云

園寺 卒都伎 雲梯
鸚鵡 通 清水 山本

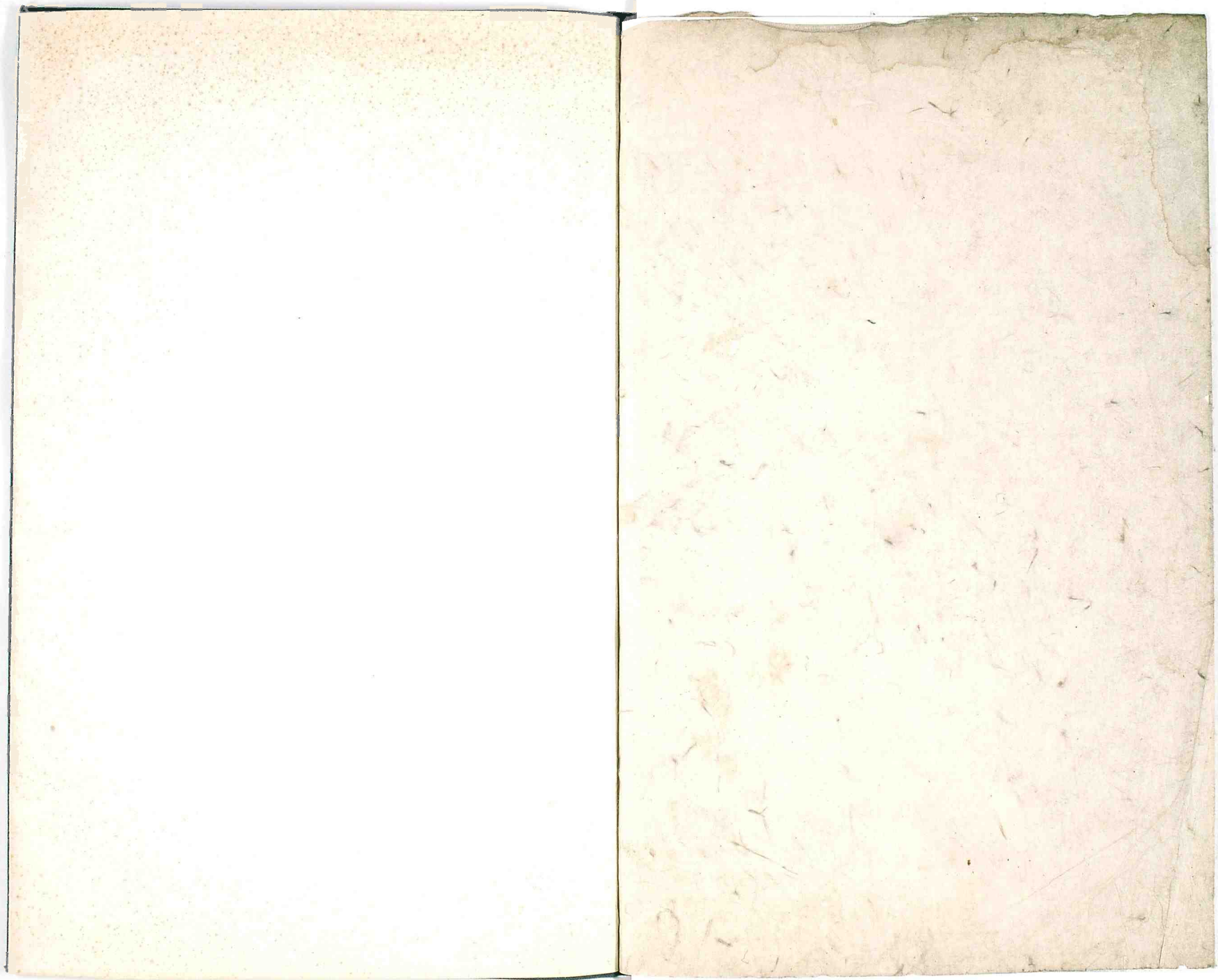
いふニ多子洗小町云

十二名歌

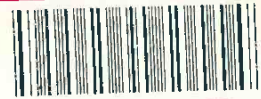
小神 伏木 虎送 兼付
福師 幽霊 元服 浄坊
洞伏 切急 生捕

○ 文字の 偏ヘ旁リ

○ 隱カク色シ 喝カク道 前マ呵カ 敬カク言シ蹕シ 並同



愛 知 県



1103280388